

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0634 ◆◆◆

21/05/06

## 【 5月相場、結果的に「大相場」となる可能性も 】

すでに終了している4月相場は「ドル安・円高」。その月足は陰線引けとなり、4月の相場見通しでレポートした経験則通り、3月相場とは逆方向に動いている。

さて、そんな経験則を踏まえたうえで、足もとの5月相場を展望すると、月間を通してなかなかの大相場をたどることが少なくない。また、いわゆる「変動幅」というデータに現れないところで大きく乱高下することも多いようだ。今月の価格変動にも引き続き注意を払いたい。

### ◎世界情勢は「北朝鮮」に注目、何かが起こる!?

筆者は、4月7日付の当レターで、4月相場について「ドル安・円高が有利」と指摘するとともに、「2ヵ月連続の大相場期待も根強い」ーなどとレポートした。

うち、前者については先で指摘したように、過去の経験則が的中した格好だが、後者は大外れ。ちなみに、4月の月間変動は3.37円で、これは1月と2月の変動より大きかったものの、それでも「大相場だった」とは到底言えないものだったことは間違いない。

ともあれ、経験則が1勝1敗に終わった4月相場を受けた足もと5月のドル/円相場はいったいどんな値動きをたどるのだろうか。同様に、恒例となっている過去の経験則を参考に、以下で考察してみる。

まずは1990年以降の星取表を調べてみると、31年間で16勝15敗。ほぼ互角といってよい結果で、特徴とは言えないようだ。

しかし、いま少し突っ込んで調べてみると、5月相場は「年間を通して、かなり荒れ模様の展開を辿ることが少なくない」という傾向がうかがえる。

とくに近年その傾向が強く、実際に幾つか例を上げると、2004年と2006年、2013年、そして2019年はいずれも年間3位の月間変動幅。また、2015年は同2位となっているほか、2010年は実に年間1位の変動を記録していた。

加えて興味深いのは、「月間を通して荒れ模様」の別バージョンともいえる、「『変動幅』というデータに現れないところで大きく乱高下するケースも多い」ーことだ。

こちら、2つほど例を挙げると、2017年は月間変動幅こそ4.14円で年間6位に留まったが、月初の111円レベルから月間高値114.37円まで上昇、そののち再び軟化して月末には110.20円台まで下落するという「行って来い」。なかなか激しい上下動をたどっているし、2018年も似たような往来相場。結果からすると、往復の価格変動はトータル7円近くにも達していた。今年のドル/円も、「結果としての激しい乱高下」を含めた「大相場」には一応注意しておきたいところだ。

一方、過去の事象、ニュースなどを振り返った場合、5月は国際的な重要な出来事が多発しているが、そのなかでもとくに注目に値するのは北朝鮮情勢に関する要因だろうか。

たとえば、2018年は「北朝鮮による、いわゆる『瀬取り』行為が公式に初めて確認される」、「トランプ米大統領が直前になり米朝首脳会談の破談通告(紆余曲折を経て、結局予定どおり6月12日に実施)」などが5月の出来事だったし、翌2019年は5月4日にその年初めての「飛翔体」を発射。以降9月10日までの約4ヵ月間で10回、少なくとも20発以上の短距離弾道ミサイルが打ち上げられることになるキッカケとなっていた。

そうしたなか、今年についても中国やロシア、イランなどの影に隠れがちだが、実は北朝鮮絡みで注目すべきニュースが幾つも伝えられている。ここ最近のもので言えば、「北朝鮮がオリンピック・パラリンピックへの不参加決定」がまさにそれで、続けて「サッカー・ワールドカップ予選も参加辞退を表明」している。

またスポーツ以外でも、金朝鮮労働党総書記の妹、金与正党副部長が談話を発表し、韓国の脱北者団体が今月初め、北朝鮮の体制を批判するビラを北朝鮮に向けて飛ばしたことに反発。「韓国政府が責任を取ることにすると警告した」ことが明らかに。さらに、バイデン米大統領が実施した施政方針演説に噛み

